

社会学の国際化に関する研究 (1)

一序論：社会学の国際化とは何か

成城大学・一橋大学 矢澤 修次郎

1. 目的

私たちの研究チームは、社会学の国際化の現状を把握し、日本の社会学の国際化を推進する要因を探るという課題に取り組んでいる。これまで2014年7月第18回世界社会学会議参加者を対象にした **Survey on Internationalization of Sociology** と2016年2-3月日本社会学会会員を対象にした「社会学の国際化」調査という2つの調査を実施した。本報告は、この2つの調査の前提になっている「社会学の国際化」とは何かを明らかにし、それが調査票にどのように反映されているかを論ずるとともに、この研究プロジェクトの基本的特徴を提示することである。

2. 方法

- (1)第二次世界大戦以降の世界並びに日本の社会学の「社会学の国際化」に関する歴史的経験を跡付ける。
- (2)「社会学の国際化」を社会科学の理論の問題として検討する。
- (3) 科学社会学などの知見に基づいて「社会学の国際化」の実践の現状と課題を明らかにする。

3. 結果

第二次世界大戦後の「社会学の国際化」は、各国の **national association** を情報交換の基軸とし、各国を代表する研究者の知見の発表と、特定の 이슈ーに関する比較研究とから出発し、その後徐々に研究テーマ別の研究ネットワークの形成とそこにおける個人の研究成果発表へと重心が移動し、発展していった。その結果、今日「社会学の国際化」とは、最も広い意味で捉えるならば、研究者個人の教育・研究実践が国境を越えることを意味すると考えられる。がしかし、歴史的、理論的に考えるならば、今日の「社会学の国際化」は、国民国家の枠組みに基づいて進められていることは明らかである。今日「社会学の国際化」は当然のこととなり、国際会議などは当たり前のこととなりつつある。この現状は、新たな視点に立って、「社会学の国際化」の理論と実践の再検討を促している。

4. 結論

今日「社会学の国際化」の理論と実践は、国民国家の視点を越える世界社会、惑星社会におけるグローバル社会科学、グローバル社会学の形成を志向し、その視点から推進する必要がある。それは、支配的な研究評価やランキングを再検討し、共同研究によってより良い研究文化を作り上げてゆくものである。